

# 市民の安全・安心を祈願 消防出初式を開催しました

新春恒例の消防出初式を1月7日、勾当台公園市民広場と市役所本庁舎前で開催し、消防職員や消防団員、婦人防火クラブ員などが参加しました。

消防出初式は、明治時代から続く伝統行事で、市民の安全・安心の確保と、消防関係者の1年の安全と奮起を誓うものです。消防車両19台と、消防隊員など約1000人による整然とした観閲行進に



▲伝統の仙台消防階子乗り。技は約60種類にも上ると言われています



◀市役所本庁舎での火災を想定した救助訓練。市役所屋上からのロープ降下が披露されました

続き、式典を実施。その後、消防音楽隊の演奏に合わせてカラーガード隊によるドリル演技や、市内7つの消防団による、市の無形民俗文化財「仙台消防階子乗り」の演技が披露されました。高さ7・2メートルのはしごの上で、命綱を使わずに繰り広げられる技の数々に、観客から大きな歓声が上がりました。

そのほか、救助訓練や一斉放水を実施。消防職員・団員など的一致団結した勇姿を見ようと、会場には平日にもかかわらず多くの方が訪れていました。

◎平成31年・令和元年は、火災件数は減少・救急車出場件数は増加  
消防局がまとめた平成31年・令和元年火災・救急概況(速報値)によると、火災件数は前年より5件減の249件で平成元年以降最も少ない件数でした。火災による死者は前年より3人減の8人で、放火(疑いを含む)を原因とする出火が最多でした。

一方、救急出場件数は2278件増の5万4816件、搬送人員は1383人増の4万7974人

## 世界に誇る日本の伝統文化を体験

日本の伝統文化の魅力を発信し、次世代へ継承することを目的に、「城下町せんだい日本伝統文化フェア」が1月11日、せんだいメディアテークで開催されました。

当日は、市内で伝統文化を学ぶ小・中学生が、日頃の練習成果として、華道や箏、日本舞踊などを披露。伝統文化の体験ブースでは、茶道や百人一首、着物の着付けなどを楽しむ親子や外国人の方も見られました。子どもから大人まで、伝統文化を身近に見て、感じられる貴重な機会となりました。

## 成人式―晴れ姿で未来への決意新たに

1月12日、カメイアリーナ仙台(仙台市体育館)で成人式が行われ、新成人たちが新たな門出を迎えました。本年度市内で二十歳を迎えた新成人は、平成11年4月2日から平成12年4月1日に生まれた1万1223人です。



▲誓いの言葉を述べる新成人代表

第1部の式典で市長は「出会いを大切に、未来を築いていく中で、存分に力を発揮してください」とメッセージを贈りました。

また、新成人を代表し、庄子知統さんと和泉葵衣さんが「令和という新しい時代を自分らしく歩み、輝く未来に力強く羽ばたいていきます」と誓いの言葉を述べました。

新成人が自ら企画・運営に携わる第2部の交流の広場には、恩師からのメッセージコーナーや、新成人が作成した「2020」のナンバーバールンなどで飾られた撮影ブース等を設置。新成人たちは、懐かしい同級生との旧交を温めながら、晴れやかな表情で大人への第一歩を踏み出しました。

## 仙台市防災功労表彰を実施しました

地域の防災・減災に尽力され、顕著な功績のあった団体等を表彰する仙台市防災功労表彰を、1月16日に行いました。昨年までの防災ボランティア表彰から名称を変更し、ボランティア団体以外も表彰の対象になりました。本年度受賞した2団体は次のとおりです(順不同)。

「仙台白百合学園高等学校」「仙台市青葉地区婦人防火クラブ連絡協議会」

でした。冬季は寒暖差等により体調を崩しやすいため、十分な睡眠と栄養のある食事を心掛け、体調管理に気を付けてください。

## パラリンピック競技「ボッチャ」に挑戦!

2020年東京パラリンピック正式種目の「ボッチャ」の若林区民大会が、12月21日に開催されました。

ボッチャは、投げたボールと目標のボールとの距離を相手と競い合う競技で、障害の有無や年齢、性別にかかわらず一緒に楽しむことができます。若林区中央市民センターでは、平成14年から講座や年に一度の大会を開催し、競技の普及を通して、障害に対する理解促進を図っています。

大会には過去最多の21チーム63人が参加。3人1チームでのチーム対抗戦が行われました。チームごとにさまざまな戦略を駆使し、



▲写真下の白いボールが目標。ボールを投げたり、転がしたりしながら、より目標に近い地点を目指します

## お風呂で健康増進を―「おふる部」に関する協定を締結

1月15日に、水道水の有効利用の促進と、健康増進等への取り組みの充実を図ることを目的として、株式会社ノーリツおよび東北福祉大学と「おふる部」に関する協定を締結しました。

おふる部は、平成28年2月に神戸市から始まった産学官連携事業で、お風呂好きの人の輪を広げていくための取り組み。東北で「入部」するのは仙台市が初めてとなります。

今後、東北福祉大学の学生を中心としたライターが、8月ごろからお風呂の魅力や効能等をSNSで幅広く情報発信していく予定です。また、水や健康に関するイベントを3者合同で開催するなど、さまざまな場面で連携し、取り組みを進めていきます。

詳しくはおふる部ホームページ  
<https://ofurubu.com>

## 3.11震災文庫を 読む

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本をご紹介します。

スローな「支縁」にしてくれ

福住町内会会長 菅原 康雄

「仙台・福住町方式 減災の処方箋 1人の犠牲者も出さないために」



菅原康雄・三好亜矢子 著 新評論 刊



三好亜矢子・生江明 編 新評論 刊

私が住む仙台市東部の福住町は川沿いの低地にあるため、たびたび水害や地震に襲われてきました。17年前に町内会会長になってから今日まで、私は、「減災」を旗印に掲げています。「減災の処方箋」では、高齢者や障害のある方など特別な支援が必要な人々のリスト作りや、町独自の防災マニュアル作り、それに基づく防災訓練、仙台市内外の町内会との災害時協力協定などの「福住町方式」を図表付きで細かく紹介しています。処方箋と銘打ちしましたが、特效薬ではありません。普段からの隣近所同士の声掛けや挨拶、自ら考え・行動する防災訓練など地道な積み重ねこそが生命を守る鍵です。

もう1冊は前述の「減災の処方箋」の共著者である三好亜矢子さんが編者の「3・11以後を生きるヒント」です。「困ったときはお互いさま」と自由闊達な「支縁」を繰り広げた13のグループ、例えば、宮城県山元町で「がれきに見えるもの」の中からそれぞれの家族にとって大切な思い出の品を掘り出す若者たちなどから、生々しい現場報告が寄せられています。欧米には、スロージャーナリズムというものがあるそうです。事件が起き、マスコミが嵐のように襲来、その熱がすっかり冷めてから初めて、その後を追いかけるのが使命です。支援においても、声の小さな人々にこそ寄り添うスローな関係づくりが求められています。

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585